



底ぬけ釜

久留島 武彦

よく肥た牝鶏一羽、毎日市に買物に行くのを、藪ぎはの穴の中から見て居りま
 した悪狐二疋、どうかしてあのうまそうな奴を捕へたいものだ、いろく工
 夫して見ましたが、戸外に出た時では、羽の生て居る自由の身體、走ると飛ぶ
 のをかねて居るので、とても捕へる事は出来そうにもない、これはうちに居る
 時をそつと行つてつかまへるに限ると、毎日二疋の狐はかはるく、鶏の御家
 をのぞいて見ますが、此の牝鶏はなか／＼用心深いたちと見えまして、家に居
 る時も、戸外に出る時も、必ず、キッチンと鋌を下して、とても忍んで入るなど

と云ふ事は出来ません。

それでも二疋は毎日々々この牝鶏をつけねらつて居ましたが、一日一疋は何かうまい工夫を案出したと見えて、にこくししながら、戸棚の中から大きな袋を引出して、これを引擔いで出てゆきました。

牝鶏はこんな事などは些とも知らず、今日も平素のやうに市に買物に行きました、いろんな重い物を一籠提て還つて來ましたが、戸口の錠前を脱した時、最前から隠れて待つて居ました悪狐は、何と思つたか小石を拾ふて、彼方の藪にバサリと一つ打込みました、此の物音にビツクリ致しました牝鶏は、何の音かと藪の方に二歩三步あと戻りをした時、狐は素早く戸を押開けて、家の中に飛込むとその儘、隅の方に身を縮めて隠れて仕舞ました、物音に驚いた牝鶏は、暫く氣をつけてその附近を見廻りましたが、何の事もないので戸をあけて家に入り、また元の様に錠を下して、やれやれと一呼吸つきました時、片蔭から飛出した狐は、唐突大袋の口をあけて牝鶏の頭の上からスツポリと打被せまし

た。

しめたッ！ と狐は小躍して、袋の口をちめやうとする時、ク、ク、ク、ク、ク、と云ふ牝鶏の啼聲が頭の上になりますので、驚いて仰向いて見ますと、袋の中に入れたと思ふた鶏は、いつかすり脱けて棚の上にとまつて居るのです。

逃たつて最う大丈夫だ、戸には錠が下りて居るし、こゝから外にはでられないのだから、御前の命はないものと思へど、しきりと下では威張つて見ましたが、羽のない狐にはどうする事も出来ず、怖い眼ばかり釣上げて鶏を睨んで居ますうち、何と思つたか狐はぐるりと身體を廻して、自分の尻毛の尖端をいつかりと口に喰へますと、その儘ぎり／＼舞を始めました。

くる／＼くる／＼獨樂より早く回るのを牝鶏は一心に見詰て居りますといつか眼が變になつて来て、頭の中がふらく／＼ふらく／＼、しまひには自分の身體までふらく／＼搖ぎ出したと、思ふ内、眼を眩して眞逆様に落るところを、狐は手早く袋をひろげてすばり受込み、そのまゝ引擔いで歸りました。

牝鷄は袋の中に逆様に押込まれて、地面を引ずり／＼擔がれて行ます内、漸と正氣にかへりました。氣が付いて見ると狐の穴に運ばれて居るので、これは此のまゝにちつとして居ては大變と、いろ／＼遁げる工夫をして居ます中、不圖よい考が浮びました。

それは成丈はたついて居ると、袋を擔ぎ悪いから、狐はきつと憇むにちがひない、憇めば袋を置くに違ひない、置けば狐はきつと晝寢をするのが癖だから居睡りをするに違ひない、そうだ其の中に遁出しようと、牝鷄は出来るだけ大きく、出来るだけ乱暴に羽を擴げてはたついて居りますと、狐は背負ふてゆくのが重くて耐らず、暫く休んで行く事にしやうと、牝鷄の考へた通り、日當りのよい松の木影に袋を置いて一呼吸ほつとつきましたが、いつもの癖はこんな時にも出て、狐はいつかふらり／＼と居睡りを始めました。

小さい鼯の聲がようやく袋の中まで聞える様になりましたので、牝鷄はもう大丈夫だと前懸の袋の中から剪を取り出し、ちよきり／＼と、袋の底を截つてそつ

と頭だけ出して見ますと、狐は顔ぼ一つと赤くして、いゝ心地で睡て居ります。もう之なら大丈夫だと、大きく袋に穴をあけて、悠々と出てきました。寝坊の狐はまだ眼が醒めず、ぐうぐう高軒で睡つて居ますから、その間に牝鶏は手早く附近の大きな石を身替に一つ袋の中に押込んで、その後を糸で縫ひつけ、そのまゝ家へ遁げて歸りました。暫くして目が醒めた狐は、袋を見ますとおとなしくなつて居ますから、それならもう世話もあるまいと、引かついたが大變な重さで、前よりも倍ですから、はてなと一度は不審にも思ひましたが、さつきは生きてバタバタして居たから軽るかつたのであろうと、その儘疑ひもせず自分の穴に引ずりぐえつちらおつちら持つて還りました。穴では待兼ねた同じ悪狐、門口に出て居ますと、大きな袋をさも重そうに引ずりぐ背負つて歸つてくるのが見えるので、さてはしめた大喜びで早速台所の大釜にお湯を沸して待つて居ますと、漸くの事で背負い込んだ袋をその儘大

釜の傍まで持つて來ました。

さあ蓋を開けろ、それ袋の口をあけると、二疋が、りて釜の上に逆様にした鶏の正体は、はづみをくつて沸湯の中にトブンと落込んだのを見ますと、思ひもかけぬ眞黒な大石で、あつと驚くひまもなく、お釜の底は打抜かれて、ザーツと流れ出ました沸湯は二疋の狐にすつかり懸り、眞赤に火傷をいたしました上もう二度と再び穴から外へ出る事さへも出來なくなりましたと云ふ。

めでたし〜

太郎さんと次郎さんの話

とよ子

太郎さんと次郎さんとは、或る夏の夕方仲よく二人で濱邊を散歩して居りました、涼しい風がソヨクと吹いてまゐりまして、何とも云へないよい心もちで御座います、やがて太郎さんと次郎とは大きな松の木の根に腰をかけ遙かに沖